
風月堂

創天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風月堂

【Nコード】

N4151W

【作者名】

創天

【あらすじ】

「これから三年間、お前達には向こうの世界の学校に留学してもらう、ちょっとした事情があつてな。」（謹んで辞退させていただきます!!!） 常識的にはあるはずなんてない 誰も見たことがない 『魔術』 というもの、そんなありもしないものがある世界で生きる主人公達、ゲームや小説などで登場する『異世界』そんな世界に送られた、術師組織「風月堂」所属の高校生五人組、送り込まれた世界で何を学び、何を感じるのか。そんな彼らの物語です。

NO、1 始まり（前書き）

はじめまして、創天といいます。暇つぶしとして読んでくださいますたら光栄です。

いろいろと設定が間違っていましたので再アップします、ユニークつけてくださった方、ありがとうございます^^

NO、1 始まり

高校一年生の夏休みが始まる十日前、そんなある日、ある学校で校内放送が流れた。

「一年A組、清色、錦野、天見、宮廻、永並、昼休みに校長室に来るように。」

「・・・僕達？」

「・・・ですね」

「・・・だな」

「何かしら」

「なんだろうね」

「まあ、いってみようか」

「そうだな、お前の親父のことだ、後で何を言われるかわからないからいくしかない」

「だよね」

突然の呼び出しに不審感を抱きつつも、僕達は校長室へ向かった。

NO、2 異世界への理由（前書き）

何の前置きもなく一回消してしまっすいませんでした。設定が短編になってしまって投稿ができなくなってしまうて><

NO、2 異世界への理由

～校長室前～

「はいるよ～親父～」(清色)

「失礼します」(錦野)

「邪魔する」(天見)

「はいるわよ」(宮廻)

「お邪魔しま～す」(永並)

「・・・お前ら、校長室に入るのにノックも無いのか・・・いくら何でも失礼だぞ」

目の前には坊主の眼鏡をかけた男・・・僕の親父がいた。

「そんなことどうでもいいから、何？」

「・・・まあいい。今日お前達を呼んだのはほかでもない、組織に關してのことだ。」

「・・・この面子が呼ばれるならそうでしょうねえ」

「わかってるならいい。この夏休みから3年間、お前達には寺からつながっている扉で向こうの世界にある学院に通ってもらう。」

((謹んで辞退させていただきます!!!))

「残念だが君らに拒否権はない。」

「親父！今日という今日はぶつつぶす！」(清色)

「プルルル・・・ガチャッ 母さん！どうゆうことですか！」(錦野)

「がんばってね～(笑)」

「・・・」

「拒否権は無い・・・か」(天見)

「・・・まず、親父を殴るわ！その次に清色さん！あなたをぶつつ飛ばす！」(宮廻)

「え～、拒否権無いの～？」(永並)

「・・・というわけだ、まあちよつとした事情があつてな・・・勘

弁してくれ、それと出発は8月28日の夜だ、その間に準備をしないさい」

というわけで僕たち五人は異世界に行くことになってしまった、これからどうなるんやら。」

NO、2 異世界への理由（後書き）

・・・なんか「」が多いですね。どうしたものか

中間登場人物紹介（前書き）

主人公達の解説です

中間登場人物紹介

〈登場人物〉

清色 きよしき 千里 せんり

千秋高校に通う高校一年生。実家が代々陰陽師のため、幼いころから陰陽師として修行している。

清色家に代々伝わる陰陽道は占いなどの方ではなく妖を祓うために特化されたものである。

錦野 にしきの 星雲 せいうん

千里と同じく千秋高校に通う一年生。実家は神社でこちらも妖を払うために特化された神道系の術を使う。星雲は楔を使う祓い方をとる。

天見 あまみ 翔 かける

千里と同じく千秋高校に通う一年生。陰陽道や神道とは違い、代々家に伝わる舞陣という、二本の刀を使い、地面や宙に妖を祓うための陣を描き、妖を撃退する術を使う。

宮廻 みやめぐり 名花 めいか

千里と同じく千秋高校に通う一年生。神道系の妖を祓うために特化した術を使うが、尺八などの日本楽器を使い、音で祓う形をとる。対人用ではないので矢に札を結んだ弓を使っても攻撃できるよう修 行した。

永並 えなみ 愛音 あいね

千里と同じく千秋高校に通う一年生。道教という術を代々ついでおり、錬丹術で霊薬を作る、五人のなかの医者的な存在。攻撃は錬丹術で劇薬（爆発したり溶かしたりする）を投げつけ攻撃する。いわゆるサポート支援型である。

風月堂（huggetudou）

被い人や術師が所属する組織。組織とは世界の被い人や術師、魔術師が所属するギルド的なもので、

ニューヨークにある、術師組織本部から依頼を受けて活動する。ランクが存在し、ランクは

「G1v」という単位、レベルで表される。ちなみに世界には700ほど組織が存在し、風月堂もそのひとつである。風月堂は1v1～10までである中の1v8というなかなかの成績である。

実際の陰陽道、神道、道教とは異なるので注意

中間登場人物紹介（後書き）

なんかごちゃごちゃとしてしまいました・・・。
精進します。。。

NO.3 それぞれの出発準備（前書き）

メインのパソコンのディスクが逝きました・・・（涙）

NO.3 それぞれの出発準備

清色 千里の出発準備

「札は向こうにも紙があるって言うから・・・とりあえず2000枚ぐらいでいつか。ってバックの四分の一埋まったぞ・・・、しかも全部紙だからパンパ無く重いんですけど！まあしょうがないか、陰陽師、札無いとやっていけないし。それと服・・・。私服を五着と正装（男用の着物みたいなもの）とでいつか・・・まあ、着なさそうだけど。」

結局優柔不断な千里の準備は夜中までかかったそうなの。

錦野 星雲の出発準備

服と本と生活用品は入れ終わった。何も忘れ物は無いな・・・

「星雲、お父さんが出発前に新しい襦作るそうよ、作ってきなさい。」
「わかりました、すぐいきます。」

準備を早めに終わらせて新しい襦を作りに行く星雲。部屋にはコンバクトに収納されたトランクが置いてある。さすが五人の中で一番の常識人である。

天見 翔の出発準備

「服と生活用品と刀・・・あまりにも少くないか？」

札などの呪物がない分即行で終わってしまった翔であった。

宮廻 名花出発準備

「尺八と、服と……。尺八のせいで何もはいらないわ……」

結局尺八は袋に入れて手でもっていったらしい

永並 愛音の出発準備

「えーと、攻撃用の爆発するピンどこいつ……。」「

聞かなかったことにしたい……」

NO.3 それぞれの出発準備（後書き）

個性豊かな出発準備です。

書いてから思った、これいらなかった気がするw

次回から本題にはいります。

NO.4 扉（前書き）

体育祭役員と放送委員会の仕事でいそがしい><

NO.4 扉

side 千里

「よし、全員集まったな。これより向こうについたらどうするか、その日程を話そう。ここから扉で向こうに行つてそこに着いたら一日学院までの道を歩いてもらうことになる。地図は星雲に渡しといたからそれを見ておいてくれ。学院があるのは（ルセンバーク）という港町だ。結構賑わっている大きな町だ。町に着けば学院まですぐだが、町の外だとたまに魔物がいるから要注意だ。学院まで着いたら衛兵に清色涼夜がいつていたものです、といえぱいい。私の友人が迎えに来てくれる。生活費や支給品などはそこで渡されるはずだ。以上、ではいつてらっしゃい。」

「親父、ちょっと質問してもいいかな。」

僕は親父に疑問に思ったことをいつてみた。

「あつちにいつて言葉・・・通じるの？」

「おお、忘れてた・・・」

ツといつて親父はズボンのポケットからネックレスみたいなものを5つとりだす。

「これをやろう、これを首に掛けとけば会話ができる。」

渡されたものには三日月に紅葉の葉がリングの中にきれいにカットされた装飾がついていた。このマークは風月堂のシンボルマークだ。けっこうかつこいいじゃないかと僕は思った。

「じゃあ、今から扉を開くぞ。」

そういつて親父は寺（僕の家）の裏のがけに埋め込まれるようにしてあつた鉄製の扉を開ける。

「それじゃあ、健闘を祈る。なにかあつたら私の友人にいいなさい。」

といつて完全に扉を開ける。奥は真つ暗だ。

「いってきます、親父」

「行ってまいります、涼夜さん。」

「いつてくる」

「じゃ、いつてくる。」

「いってきます」

親父にいつてくるといつて僕達は扉の奥に進んでいった。

NO.4 扉（後書き）

どう文をおいたらいいのかまったくわからない。
どなたか教えていただけたら嬉しいです^^;

NO.5 まだ見ぬ世界へ（前書き）

暑いですね・・・扇子が手放せないw

NO.5 まだ見ぬ世界へ

side 千里

「皆さん、ここからは何が出るのかわからないので固まっていきましよう。」

「了解だよ星雲。」

友人の的確な指示に感謝する、やっぱり頼れる友達はいいいね！

「それにしても中にランタンが灯ってて本当に助かった。」

「なかつたら術応用することになるもんな。」

「だよね。」

多分親父がこつちに行つたときにつけていったものだろう、親父ありがとう、たまにはいいとこみせるじゃん。

「あ、そうだ。『我と契を交はしし者よ、我が求めに応じ姿を顕したまえ。』飛雨！？風！」

肩がけバックから2枚の特殊な印の書かれた札を取り出し、それに靈力を込めて空に放る。

「千里、呼んだ？」

「呼んだからきたんでしょ！」

出てきたのは目が蒼いツバメと2尾の狐、僕の式のなかの二人？二匹？だ、

「二人とも、ちょっと手伝って、もうすぐ出るから。」

「ここどこ?」

「異世界」

（（ええ!））

「お前の周りはいつにもぎやかだな」

「・・・うるさい」

「もうすぐでますよ、準備はいいですか?」

（（もちろん!））

正直来るのは嫌だったけど、今の僕は異世界に行くのがとても楽しみだった。

NO・6 扉の向こう（前書き）

大変復帰が遅くなりました。申し訳ないです。

NO・6 扉の向こう

《side 風里》

「では、扉を開けます。」

星雲が先頭に立って扉を開けるために確認を取る。それに僕たちは無言でうなずいた。

ギイ・・・

錆びれた音がして扉が開く。そこから見えるものは・・・

「「夜???」」

あたり一面闇に覆われた夜だった。

「時差は特に無いようなので夜ですね。」
星雲が一応説明した。

「「そうなのか・・・」」
星雲を除いた4人がっかりする。

「とりあえず歩きましょうか。」

そついつと洞窟から出る。僕たちもそれに続く。

「えっと、これから西に向かいます、おや、あれは・・・」
「ねえ、なんかいやな予感がするんだけど。」

出てきた早々、気持ち悪い植物（なんか動いてるし）に囲まれてしまった。

NO・6 扉の向こう（後書き）

とんでもなく短いですが、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4151w/>

風月堂

2011年10月31日17時08分発行